書下し問題小説

小説 霊感商人 上

白龍仁

江苏工业学院图书馆
藏书章

小說 靈感 (上)

白龍 仁

出版研

小説 霊感商人(上)

昭和62年9月10日　初版発行　　定価 680 円

著　　者　白龍仁（はくりゅうじん）

印刷製本　　(株)誠宏印刷・和興堂(株)

発行所

東京都千代田区神田神保町1-47 電話(03)233-3241

出版研 (株)出版科学総合研究所

乱丁本・落丁本は本社でお取替えいたします。©Jin Hakuryu 1987

ISBN4-87969-026-0 C0093 ¥680E

上巻目次

一章　倒産非情　5
二章　焦燥の日々　38
三章　教祖研究　75
四章　偽神の誕生　131
五章　野望の布石　161
六章　泣き地蔵　214

下巻目次

七章　集金論理　十章　教団オルグ　終章　美談伝説
八章　迷彩教義　十一章　仮面の涙
九章　泣訴の行　十二章　精舎建立

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

小説　霊感商人（上）

まさにそれは、新谷京助の神をも恐れぬ企みというべきであった。

巨億の富の中に、自らの生涯を埋めるために、新しい宗教を起こし、自らが教祖の座につこうという飽くなき野望である。

しかし、その思いつきは、啓示の如く、彼の胸中に勃然として湧き上がったものではない。

倒産により、極貧と絶望に追いつめられた新谷京助が、暗黒の人生の中で、手さぐりでつかんだ一発逆転のシナリオであった。

三年前――

新谷が倒産して三年目であったが、宗教界に二つの事件が相次いで起こった。

一つは、大教団の教祖の脱税事件であり、もう一つは、小さな教団の教祖が病死して、二十人の信徒が殉死するという衝撃的な事件であった。

その二つの事件が、一獲千金の幻覚にまみれて呻吟していた新谷の心に、恐るべき野望の業火を点じたのである。

一章　倒産非情

脱税事件の教祖は、竹村円空であった。

新谷は、倒産する五年前に、この竹村円空を訪ねた事がある。当時、竹村は、東京江戸川区、総武線の平井駅から歩いて十分程の、小さなアパートの一室で、占いをしたり、祈禱師の真似ごとをして糊口をしのいでいた。

竹村のアパートは、幅三メートル程のどぶ川に面して建っていた。橋を渡って、玄関へ入ると、すえ

たどぶの匂いにまじって線香の香りが鼻をついた。奥の右手が竹村の部屋で、香の匂いは、そこから流れ出ていた。

ドアの左上に「霊言会」という標札大の小さな看板がかかっていた。下手な毛筆の文字で書かれた間に合わせの看板であった。

ノックをすると、色の黒い、頬のこけた和服の男が顔を出した。

「横内さんより紹介いただいた……」

そこまで言うと、頬をゆるめて、

「ああ、オモチャ屋の社長さんね。どうぞどうぞ……お上がりください」

顔には似ず愛想のいい男である。

狭い玄関で靴を脱ぐと、そこは応接室で、部屋に不釣り合いな虎の毛皮が敷いてあった。その上に座布団を置くと、竹村は、新谷に座るように手で示した。新谷にすすめて、自分で向い側に座った。その時、和服の裾が割れて、駱駝の股引がのぞいた。

不潔な印象がして、新谷は思わず目をそむけた。

他に、人の気配がなく、竹村は、茶器が伏せてあるお盆を手元に引き寄せ、自分で、慣れた手つきでお茶を入れ、新谷にすすめた。

「新製品を出すそうですな」

竹村は、お茶をひと口啜って口を開いた。

「ええ。それで、先生のご判断を仰ぎたいと思いまして……」

「どんな商品です?」

「歌うロボット自販機です。百円を入れまして、レバーを回しますと、カプセル入りの玩具が出て来るんですが、その玩具にちなんだ歌をロボットが歌うんです」

「玩具にちなんだ歌をロボットがね……」

「赤い靴のキーホルダーが出て来れば、ロボットが赤い靴をうたいます。小鳥のペンダントが出て来ると七つの子とか……玩具の種類に合せて五十曲程用意しています」

「ハハハハ。面白いですな。ロボットが歌をうたうわけですな」

大きな声で、さも楽しそうに竹村は笑った。
「ロボットのキャラクターは、大体、こんな感じです……」
新谷は、カバンから、一枚の絵を出して竹村に示した。ペンギンを擬人化した、幼児と等身大のロボットである。腹部が透明なプラスチックのボックスで、そこが玩具の入れ場所になっていた。
「これはいい……ハハハハ。可愛い。このペンギンが歌をうたうわけですな」
「そうです」
「面白いじゃないですか」
「単にこれだけのアイデアでヒットするかどうか自信がないんです」
「そういうものですかな」
「玩具の企画というものは、まったくもって五里霧中でしてね、何年この仕事をやっていても、分かりません。玩具がヒットするということは、業者の予測を越えているんです」
「腕に足をからませると尻尾を振る犬のプリプリは、あなたの会社が発売したものだそうですね」
「ええ、六年前です。大ヒットでした」
「あなたをご紹介いただいた、問屋の横内さんも、当時、笑いが止まらないようでしたが……」
「そうなんです。あの時も、まさか、あんなに爆発的に売れるなんて、考えてもおりませんでした。絶対に売れると思っていた玩具が惨敗し、最初から期待していなかったものが大ヒットする……これでかえって自信を失くしてしまいます」
「どんな商売でも、多かれ少かれ、そんなものじゃないでしょうか」
「特に玩具はひどいようです。あれ以来、私の会社ではヒット商品がありません」
「……」
「歌う自販機ロボットに会社の存亡がかかっています。もし、ヒットしそうになければ企画は中止して、路線を変更します。GOかSTOPか、先生に占っていただきたいのです」
と、一応真剣な口調で言って、竹村に、切羽詰ま

った真情を吐露して見せたが、新谷は、あまりこの手の占いを信用していなかった。特に、竹村の和服の裾からはみ出した股引きで、かすかな期待すら消え失せていた。

新谷は、最初から、竹村を訪ねることに、あまり乗り気ではなかったのだ。

自分でサイコロを振って、奇数なら中止、偶数ならGOに決めようと考えていた程である。しかし、新製品の開発を相談した問屋の社長横内剛三は、竹村円空の熱心な信者で、竹村に占ってもらうよう、新谷に強く進言した。

〈サイコロよりは、まだましかもしれない〉

そう考えて新谷は、竹村を訪ねたのである。

「それでは占ってみましょう」

竹村は、立ち上がって後ろの襖を開けた。

次の間は六畳の和室で、小さな祭壇が飾られていた。竹村は、太い蠟燭に火を点じ、着物の上に袈裟をまとって、祭壇の前に座った。

やがて、大鼓や鐘を叩き、呪文を唱え、激しく首を振った。体がわななき、こけた頬がひくひくと痙攣した。

突然、絞り出すような声で、竹村は何やらわめいた。よく聞き取れないので新谷は身を乗り出した。

「やるべし、やるべし」

と、竹村は言っているようであった。

「葉月にやるべし……」

と、言うと、がっくり肩を落して、竹村は大きく、何度も呼吸をくり返した。

しばらく、苦しそうに肩で息を吐いていたが、やっと新谷の方を向いて言った。

「お聞きの通りです」

「えっ？」

「葉月にやるべしとご神示が出ました」

「葉月と申しますと？」

「八月です。八月に発売に踏み切れば間違いありません」

「二八の八月で大丈夫でしょうか？」

新谷が不安そうに疑問を呈すると、その口をふさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ぐように、
「ご神示ですよ」
竹村は、むっとした声で言った。

2

新谷は、「御神示」に忠実に、その年の八月に、「歌う自販機ロボット・ピーター」の発売に踏み切った。
ご神示は幻に終った。
新製品は惨敗であった。
しかし、新谷は竹村を恨まなかった。最初から竹村の占いに、大きな期待を寄せていたわけではない。ただ、かくも見事に裏目に出るのなら、サイコロを振って、自分で進退を決めればよかったと、ふと思っただけである。
歌うロボットを発売して五年後、新谷の会社は倒産した。結局、歌うロボット自販機が命取りになったのである。
歌うロボットの顧客となるべき幼児たちは、生まれた時から、テレビマンガを見て育っていた。感覚が異質で、赤い靴や、夕焼け小焼けを歌うロボットには、さしたる感興を示さなかったのである。
負債総額三億六千万円。その内暴力金融やサラ金など、筋の悪い借金が八千万円もあり、再起は絶望的であった。
新谷は、妻にも、娘たち二人にも捨てられて、一人になった。
倒産時、暴力金融の激しい取り立てから身を守るために、同じ筋の整理屋の懐(ふところ)に飛び込んだ。悪夢のような倒産の整理が終り、その筋の幾つかに話をつけると、残された会社の資産は、僅(わず)かに一千万円程であった。
「増やしてやるから俺に預けてみな。これをだな、十日に一割の利子で貸付ければ、月に三百万円にはなる。山分けしても、月に百五十万円にはなるぜ。これがおまえさんの当座の生活費と再起の資金っていうわけよ」

整理屋の内田に言われ、会社の資産のすべてを預け、債務は、ほとんど踏み倒した。
整理が終って、一年程、新谷はその整理屋のもとで、取り立ての手伝いや走り使いをした。
預けた一千万円の利子が、毎月百五十万円入って来る筈であったのに、手伝いの日当も含めて、百五十万円はおろか、その半分も入って来なかった。倒産する一ヵ月前、新谷の保証人になったために二千万円の負債を背負った町工場の親父が、泣きついて来たことがある。
「息子がオートバイで交通事故を起こしたんだ。脳の手術をしたんだが、入院費その他でどうしても百万円程いるんだ。あんたも大変なことは分かるが、何とかしてもらいたいんだ。わしは、あんたの保証人になって、家屋敷が押えられている。毎月十五万円もの大金を、あんたのために支払っているんだ」
口調はきついが、声はふるえて、目は涙ぐんでいた。
新谷は、胸をつかれ、言葉もなかった。会社をつぶすことの恐ろしさと罪のふかさに体がこわばった。
新谷は、整理屋の内田に、預けた金の内から二百万円程融通してくれるように頼んだ。
「何に使うんや。女はあかんで。女は商売の邪魔や……あんたは、今が一番大切な時やからな」
どういうわけか、内田はとぼける時には関西訛になった。
「そんなんじゃない……。高木プレスのおっさんから泣きつかれたんだ。息子が交通事故で入院し、手術の費用がいるんだ」
フン、鼻を鳴らして、口をへの字に歪ませて内田は憎々しげに言った。
「甘い甘い。あんた、人の事面倒見る立場かいな。自分の頭の蠅も追えないくせして……他人に同情するヒマがあったら、自分の事同情したらええがな……ハハハハ」
「私の保証人になって、家屋敷が押えられ、毎月十五万円ずつ返済しているという……。それもほとんどが金利だという話だ。来年は家を処分しなければ

ならんだろうと言っていた。家を処分すれば、工場で仕事ができなくなる……」

「ハハハハ。それがどうしたんや。他人の事やないか……あんたは、高木プレスだけに迷惑かけているんじゃないんやぜ。あんたには八十何名かの債権者がいて、すべての人が、あんたに痛い目に遭わされているのや。八十何名かの債権者の子供が交通事故を起こしたら、あんたは、全部二百万円ずつ面倒見るというんかね。そんな金、どこにあるんや」

内田は、赤ら顔を振り立てて、踏み倒しの論理をいきまいた。

最初から、内田には、金を融通するつもりはなかった。

その時、新谷は、このままでは、一生内田の飼い殺しになってしまうのではないかという、かすかな恐怖を感じた。

独立をしなければならない。当てがあるわけではなかったが、新谷はそう思った。

それから二カ月程して、新谷は、内田に対し、預けてある金の返済を申し出た。

「おお分かった。そんなら、計算してみるで、二、三日待ってくれや」

「計算？」

「そうやがな……いろいろあんたのために出費した金が溜まっているで、清算してもらわにゃならん」

新谷は、彼に立て替えてもらったものなど一文もないと考えていたので、内田の言い分に納得がいかなかった。

内田の態度は、手のひらを返すように変った。

三日めの夕刻、内田からびっしり数字が書き込まれた請求書がつきつけられた。

返済どころか、百五十万円の過払いを清算するように請求された。

内田の請求書によると、話がついていた筈のサラ金何社かに、利子が支払われていた。これで預けた一千万円の約半分が消えたことになっている。

さらに、請求書の数字を子細に検討すると、二人で出かけたソープランドの代金、二人で飲んだスナ

ックの支払い、オフィスの家賃の半分、彼が仕事で使った交通費、コピーの機械のリース代の半金、オフィスのトイレットペーパーに至るまで、新谷の負担分になっていた。
「この利子の支払い……領収書ある？」
「そんなものあるけえ！おめえ俺を信用できねえっていうんかい」
内田は、最初からケンカ腰であった。
「信用できねえのなら、直接行って聞いてきたらいいやんけ」
新谷が行けない弱味があるのを知っていて、内田はうそぶいた。
「あの時の、この食事、これ、あなたの奢りじゃなかったの？」
新谷は、請求書の一行を指でさし示して、内田に抗議をすると、彼は、冷笑を浮かべて、ねっちりとからんできた。
「なんで俺がおまえさんに奢らなきゃならんのや……甘ったれるのもいい加減にしてくれよな。本来なら、おめえは、腕の一本、足の一本もへし折られて、裸にされて放り出されるところを、俺が助けてやったんじゃねぇか。それが領収書だと？　ふざけた事をぬかすんじゃねぇよ」
新谷と内田ではケンカにならなかった。
債権者を踏み倒して横領した一千万円を、正面切って、内田に返却せよとせまれない後ろめたさが新谷にはあった。
新谷は、預けた金を諦めて、整理屋の高利貸、内田のオフィスから、身の回りの品を少しだけ手にして姿を隠した。

3

それから二年半、新谷は、生活感覚も稀薄に、魂を奪われた木偶人形のように暮した。
整理屋から逃げ出して最初に勤めたのは、盛り場のパチンコ店であった。
土曜日や日曜日でもないのに、どこから人が集ま

って来るのか、と思えるほどに人が群がって来て、開店と同時に満員になった。
玉の出る音が、店内に響き渡っていた。打ち止めを告げるスピーカーが、声を枯してがなり立てていた。切れ目なしに、軍艦マーチがボリューム全開で流されている。
しかし、新谷は、それらの騒音が、まるで耳に入らないように、店内を夢遊病者のように漂いながら、与えられた仕事を、無表情に処理していた。
新谷は、店だけでなく、パチンコ店の寮に帰っても、放心した人間のように、体を投げ出し、無感動にテレビの深夜映画を見て、泥のように眠るという生活をくり返していた。
そんな時期に、偶然に手にした週刊誌に、竹村の記事が出ていた。
『七年間で信徒二十万人——末法を説き続ける謎の生き神様』
週刊誌の記事はルポ風の、軽い特集で、それでも四頁に渡って、竹村の教団が紹介されていた。
合掌し、半ば俯いているが、見覚えのある竹村の顔写真が大きく掲載されていた。
あの、ドブの悪臭が風に吹かれて流れてきたK町のアパートから、どんな経緯で、十年足らずの間に大教団にのし上がったのか、記事は、竹村の驚異の超能力に驚嘆し、信奉する信徒が、全国から参集して、数年間で大教団の基礎を築いたと書いてあった。
あのぼろアパートのドアの入口にかかげられていた「霊言会」という名称は、今も、そのまま用いられていた。
『竹村円空氏は、驚異の超能力で人類の未来を透視し、地球は、このまま進んで行けば滅亡するであろうと、恐怖の予言をしている。それは、神の意に反して、物質文明を急激に押し進めた人間へ神が下す、死刑の宣告だと竹村氏は語る。
この刑から逃れるためには、私利私欲を捨て去り、私財をすべて神仏に還元しなければならないと竹村氏は説く。この不気味な末世の思想が、救いのない現代を生きる若者たちの心をとらえ、魅了している

ようである』

週刊誌は、オーバーに、竹村を神秘的で、偉大な予言者に仕立て上げていた。

新谷は、苦笑しながら読んだ。なぜなら、竹村円空は、新谷が会社の存亡を賭けて企画した「歌うロボット自販機」の未来に関しては、まるで見当ちがいの予言をし、新谷を倒産に追いやったのである。その竹村が人類の予言者とは笑止であった。

記事の中に、教団の大聖堂、礼拝道場など鉄筋の大建築の写真や、信徒が東京の代々木公園を埋めつくした立教十周年祭の写真などがあしらわれていた。

その週刊誌を読んだ時の新谷の感慨は、いまいましさと馬鹿馬鹿しさに、多少の驚きが入りまじった複雑なものであった。しかし竹村を恨む気持ちも羨やむ気持ちもなかった。竹村円空は、その時の新谷京助にとっては、しよせん無縁の人間であった。

竹村のことは、週刊誌を閉じた時、新谷の心のへりから払い落されていた。

竹村が、新谷に対し、大きな衝撃を与えるのは、それから一年程先の脱税事件である。

4

相変らず、新谷は死んだように生きていた。パチンコ店での二年半は空しい時間の流れであった。

「仮死」という言葉に対し「仮生」という言葉があるとすれば、まさに、新谷の生活は、「仮生」であった。その「仮生の日々」に、一石を投じたのが、暴力団員Sである。

Sは、倒産時、暴力金融の手先きとして、整理屋の内田の所に乗り込んで来た一人である。

その日も、パチンコ店の店内を、右に左に、新谷は、客の罵声や信号灯の点滅に引き寄せられて小走りに往来していた。

「新谷さん」

呼ぶ声がする。振り返えるとSであった。

「よおっ……ここに勤めていたの……」

パチンコ台を離れて、Sは新谷のそばに歩み寄っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong